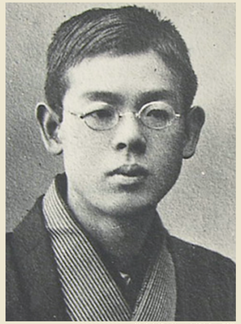
瀧 廉太郎

Rentaro Taki



瀧 廉太郎の妹 ※安部トミ氏 所蔵

天才音楽家 瀧 廉太郎は明治12年8月24日東京市芝区南佐久間町2丁目18番地で、父、瀧 吉弘の長男として生まれた。父が内務省に勤めていた関係でたびたび転任したので、廉太郎もしばしば学校をかえている。

彼の生い立ちについては、父吉弘の自筆の履歴書をもとにして、彼の生涯を記すことにした。

小学校は明治19年5月神奈川県で入学し、ただちに富山県師範学校付属小学校に転じた。ここで1年半をすごし、明治21年5月麹町小学校尋常第3学年に転入、23年3月尋常科を卒業、高等科に入学した。この頃父が大分県大分郡の郡長であったため、同年4月同校を退学帰郷して、同年5月大分県師範学校付属小学校高等科第1学年に転入学した。24年父が大分県直入郡々長に転じたため家族とともに竹田の町に移り、25年1月直入郡高等小学校第2学年に転入した。そして多感な少年期をここで過ごしたのである。そして27年4月竹田小学校を卒業した。ここでの2年有余の生活が廉太郎の音楽志望へ大きな影響を与えたのではなかろうか。同年9月東京音楽学校に入学、小山 作之助先生をはじめ、多くの先生、先輩の庇護のもとで勉学にはげんだ。明治29年12月12日、彼は学友会の音楽会に初演奏をしている。曲目はラインベルゲル作のバラードといわれていたが、このたび彼の署名入りの写譜を見出したので明確にすることが出来た。

明治二十九年十二月十二日音楽学校学友会ニ於テ此曲ヲ独奏ス、
是レヲ予ノ独奏ノ初メトス。時専修部二年生

瀧 廉太郎記

BALLADE

Revised and Fingered by John A Preston

Josef Rheinberger op 7 . No.1

この演奏で彼の実力は大いに認められ賞賛された。一方、彼は美しいテノールの声をもっていて、学友会の音楽会に重唱や合唱にたびたび出演している。また管弦楽でクラリネットを吹いていたことが分った。専修部2年の頃から演奏だけでなく、作曲、作詞の方にも頭角をあらわしはじめた。30年2月「砧」作詞、3月「日本男児」作曲、7月「春の海」、8月「散歩」作曲、12月「枯野の夕景」作詞、31年7月専修部を優等で卒業、9月研究科に入学した。32年9月音楽学校の嘱託になって後輩の指導にあたることになり、留学出発までの満2年間を熱心に指導した。この間に作曲、作詞したものが現在一番多く残っている。32年に作曲した「四季の瀧」は今まで旋律だけであったが、自筆の2部に書かれた伴奏付の楽譜を見出した。33年10月1日ピアノ曲「メヌエット」、11月1日組歌「四季」そして「幼稚園唱歌」の編纂をはじめ「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」もこの時代の作品である。また「友の墓」という外国曲に和声を付したものがあるが、多分この頃の作であろう。

33年6月付でドイツへの留学が発令されたが、出発を延期して34年4月6日横浜港をドイツ船ケーニヒアルベルト号で出帆した。途中長崎港で高塚 鏗爾の見送りをうけた。船中多くの便りを親友 鈴木 毅一や瀧 大吉宛に出したのが現存している。

42日の長い旅を終え、5月18日ベルリンに到着、ここで 厳谷 小波と再会した。そして3週間滞在、見物して6月7日ライプチヒに着いた。10月1日音楽学校コンセルヴァトリウムの試験に合格、翌日より学生となって授業をうけている。

冬の訪れに瀧はその寒さで風邪を引き、ついに全快することなく、翌35年8月下旬帰国することになった。途中、ロンドンのテームズ河畔のチルベリイドックで「荒城の月」の作詞者 土井 晚翠と、最初にして最後の劇的な会見をし、10月17日横浜港に上陸、東京市麹町上2番町22番地の瀧 大吉の家に落ち着いた。しかしはからずも11月23日、最大の理解者であった従兄の瀧 大吉が脳溢血で他界したため葉山での転地療養をあきらめ、病を心配して葬儀にも参列せずに24日に東京を出発して大分の父母の許へ帰った。

その頃、父は官職を去り、大分県大分町339番地で悠々自適の生活をおくっていた。瀧はここで療養につとめながら「荒磯」をはじめ多くの作品を書いたであろう。しかし彼の病気が胸の病であったため、母が彼の死去の後焼いてしまい、大分での作品は35年12月29日付の「荒磯」と36年2月14日付のピアノ曲「憾」のみが残っている。

出典：大分大学名誉教授　小長久子著「瀧 廉太郎 全曲集」

◀ 裏面もご覧ください

和暦	西暦	月日		年齢
明治12年	1879年	8月24日	東京市芝区南佐久間町2丁目18番地に生まれる	
明治15年	1882年		家族と共に横浜に転居	3歳
明治19年	1886年	5月	神奈川県小学校に入学	6歳
		9月	富山県師範学校付属小学校に転入	
明治21年	1888年	5月	麹町小学校尋常科第3学年に転入	8歳
明治23年	1890年	5月	大分県尋常師範付属小学校高等科第1学年に転入学	10歳
明治24年	1891年	12月	家族と共に竹田に移転	12歳
明治25年	1892年	1月	大分県直入郡高等小学校第2学年に転入	
明治27年	1894年	4月	同校において高等小学校全科卒業	14歳
		5月	上京　瀧 大吉の家に落ち着く　麹町区平河町 芝唱歌会に入会	
		9月	東京音楽学校に入学	15歳
明治29年	1896年	12月12日	学友会音楽会にピアノ独奏（初演）	17歳
明治30年	1897年	2月	「砧」作詞　雑誌「音楽」66号に発表	
		3月	「日本男児」作曲　同上誌67号に発表	
		7月	「春の海」作曲学友会誌5号に発表	
		8月	大分県竹田町に帰省　「散歩」作曲　雑誌「音楽」72号に発表	
		12月	「枯野の夕景」作詞　同上誌75号に発表　「命をすてて」作曲　同上誌に発表	
明治31年	1898年	7月 9日	31年度卒業演奏会（専修部卒業）にピアノ出演	
		9月	研究科入学	19歳
明治32年	1899年	9月	音楽学校嘱託となる	20歳
		11月23日	「我神州」作曲	
		11月26日	秋季演奏会ピアノ出演「四季の瀧」作曲「尽せや」はじめ9曲を習作	
明治33年	1900年	6月12日	留学命令を受ける	
		10月 1日	「メヌエット」作曲	21歳
		月日不明	「古城」作詞　「友の墓」作曲	
		11月 1日	「四季」出版	
		11月 7日	麹町上2番町聖愛協会で洗礼を受ける	
明治34年	1901年	3月	＜中学唱歌＞に「荒城の月」「豊太閤」「箱根八里」を採用される	
		4月 6日	ドイツへ出発	
		5月18日	ベルリン着　厳谷 小波、幸田 幸に会う	
		6月 7日	ライプチヒに移る	
		7月25日	「鳩ポッポ」等　幼稚園唱歌出版	
		10月 1日	ライプチヒ音楽学校入試合格	22歳
		11月25日	感冒にかかる	
		12月 2日	大学病院に入院	
明治35年	1902年	7月10日	帰国命令発令	
		8月24日	アントウェルヘン出帆　午後5時	23歳
			ロンドン着　土井 晚翠、姉崎 正治 の両氏に会う	
		10月17日	横浜着	
		10月30日	「別れの歌」作曲	
		10月31日	「水のゆくえ」作曲	
		11月24日	郷里大分に出発	
		11月末	大分の両親の家に落ち着く	
		12月29日	「荒磯」作曲	
明治36年	1903年	2月14日	「憾」作曲	
		6月29日	大分の自宅で逝去	
			23歳と10ヶ月たらずの短い生涯を閉じ金池町万寿寺に葬られる	